

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：田中 治彦 (たなか はるひこ)
- (2) 年 齢：69 歳
- (3) 参加事業：第 2 回「東南アジア青年の船」事業 (1975 年)
第 28 回「東南アジア青年の船」事業 (アドバイザー、2001 年)
- (4) 職 業：上智大学名誉教授



■ 応募のきっかけ

事業に応募したきっかけは、青少年団体である郵便友の会からの推薦です。当時は人々の目は欧米に向けていてアジアには関心がなく、メディアでもほとんど情報がありませんでした。**東南アジア諸国は距離的にも歴史的にも近い国々なので、将来的に日本が関わらないことはないであろうと感じていました。**それまであまり知らなかったアジア世界を肌で感じて、理解したいと思い、「東南アジア青年の船」事業 (以下「東ア船」という。) 応募を決意しました。

東ア船に参加して ASEAN の青年たちと船の上で共同生活し、また訪問活動をするにより、アジア世界を生でとらえることができました。自身はその後、1980 年よりアジア諸国との民間国際協力事業に関わることになりました。また、大学に勤務してからは開発教育を積極的に研究し、教育しました。自身がその後**アジアと関わる最初の出発点となったこと**の意義は大きかったと思います。

■ 事業参加経験が自分自身のキャリアパスにプラスになった

参加当時は大学 4 年生で教育学を専攻していました。その後、大学院に進学して、当初はイギリスの青少年教育の研究をしましたが、いずれアジアに関わりたいと考えていました。教育の分野でアジアと関わるのがしばらくはできなくて模索の日々が続きましたが、1980 年に日本で最初の開発教育に関するシンポジウムが開かれました。開発教育とは、開発途上国が抱える諸問題に先進国である日本人がどう向き合ったらよいかを考える教育活動です。東ア船参加以来、自分が求めてきたものをようやく発見しました。1982 年に開発教育協会が発足するに当たって創設会員として関わりました。以来、理事や評議員として開発教育協会の活動に参画して、2002 年には代表理事を務めました。現在でも理事として、開発教育と ESD の実践と普及に努めています。

また、1980 年から 86 年にかけては、日本国際交流センターに勤務して、アジア地域との民間国際協力の仕事を行いました。対象国が東ア船の参加国と重なっていて、ASEAN 各国に出張する度に外国既参加青年と会うことができ、文科省等の政府関連機関を訪問する際には情報提供いただくなど**支援を受けることができました。**

大学の教育の一環で、スタディツアーを行うことがあり、タイやラオスを訪問しました。その際のプログラム作りにおいて東ア船などの国際交流の経験が実際に役立ちました。

■ 特にプラスになったプログラム

船内での共同生活と船内活動が特にプラスになりました。国の枠組みを離れて、共に活動できたことの意義は大きかったと思います。ASEAN 各国は、宗教や文化の背景が違いますが、そのような中でも共同で生活し活動することができたのは、「**多文化共生**」が**実際に可能**であることを確信させました。

多文化共生が可能だと確信した具体的なエピソードがありますか。

当時使用していた船はよく揺れて、青年たちは船酔いがひどくなると、甲板で毛布をかぶって寝ていて、甲板はまるで難民キャンプのようでした。食事を持って行ったり、水を届けたりしてお互いに介抱して助け合ったものです。青年たちは、最初は国ごとに活動しているのですが、船酔いのせいでお互いに助け合わざるを得なくなり、その結果、他の国の青年たちとも親しくなりました。自国以外のナショナル・デーの出し物の手伝いに行き、違和感なくその国の青年たちの間に交じって活動していることもありました。

事前研修ではASEAN 各国は宗教、文化が違うと教わっていたから、緊張して参加しましたが、実際にはゆるやかなアジア的な価値観の世界でした。

■ 事業参加経験が現在のキャリアパスに影響している点

主に三つあります。1. 当時、欧米中心の世界にあって、「アジア」に目が見開かれたこと。2. 英語でのコミュニケーションに自信が持てるようになったこと。3. 世界が抱える問題（当時は南北問題、今では SDGs）の実態を知ることができ、その解決に向けた教育を考えたこと。

参加国は、儒教、仏教、キリスト教、イスラム教などさまざまな宗教的背景を持った国々でした。それにもかかわらず、船内生活を通して多文化多宗教の状況でも、**お互い理解し合い、協力できることを具体的に学んだ**ことの意義は大きかったと思います。

大学の授業や一般向けのセミナーにおいて、青年の船の経験やアジア世界の現実を生で語れるようになり、授業やセミナーの効果を高めることができました。

「お互い理解し合い、協力できることを学んだ」印象的な出来事がありますか。

船を用いた事業の強みは、船内で長い期間、共同生活を営むことによって、**最初は国や文化の枠に縛られていても、長く生活する中で個人として関わりをもつようになること**だと思います。船内は私たちにとって「家」のようなものでした。一方、寄港地活動は「仕事」。寄港地が近づくと制服に着替えて、「おい、仕事だぞ」と言われて出勤するような気分でした。寄港地ではセレモニーも多く、国の代表という看板を背負って活動するからでしょう。その後、船に戻ってくると「家に帰ってきた」とホッと、すっかりくつろいでいたものです。船内で過ごす時間が長いとうれしかったのを覚えています。このように共同で生活し活動する体験から、お互いに理解し合い、協力できることを学んだように思います。

■ 船内活動においてキャリアパスに特にプラスとなったプログラム

ナショナル・デーの企画運営です。**各国青年からの反応に学ぶ点が多かった**と思います。自身のプレゼン能力が向上しました。同時に、英語力の不足を感じて、下船後に英語の学習に力を入れるようになりました。

また、各国青年が混じりあった班活動は有意義でした。国や文化が違うため、異なった価値観やものの見方を学ぶことができました。多文化のメンバーで共同作業をする難しさと楽しさを体験できました。

■ 寄港地活動においてキャリアパスに特にプラスとなったプログラム

地元青年との交流はとりわけ印象的でした。国や文化が違っていても若い世代として通じ合うことは多かったと思います。寄港地での視察は観光地が多かったのですが、それでも**街中の貧富の格差など**を感じました。その後、貧困問題や開発問題に関心を持つきっかけとなりました。

また、フィリピンでのホームステイ体験は、現在に至るまでその影響が続いています。ホームステイでは、参加青年のお宅に日本青年 3 名で行きました。パンパンガという車で 10 時間もかかるところでした。1 泊 2 日の滞在で、楽しく過ごして

帰ってきましたが、後で聞いたところによると、この参加青年のお父さんは大の日本嫌いだったとのこと。個人的に何か不愉快な経験をされたのか、あるいは当時の反日感情の影響だったのかは分かりません。しかし、今回のホームステイで、「最近の日本の若者は悪くない。軍人とは違う」とおっしゃるようになったと聞きました。この参加青年が東ア船事業に参加して日本が大好きになり、日本で就職することになった時も、お父さんは喜んで送り出してくれたそうです。この参加青年は来日して銀行で勤務し、その後、大変な活躍を重ね、頭取になりました。

この参加青年のお父さんは、私が 40 代のころ、ご家族で日本に観光旅行に来てくださり、再会することができました。東ア船のホームステイを受け入れてくださった当時、パンパンがで日本人に会ったことのある人は皆無に近かったはずですが。東ア船事業のおかげで、実際に日本人と交流する機会ができ、かつては日本嫌いだった人が日本のファンになって、観光旅行に来られるようになったことを考えると感慨深いものがあります。

どんな場面で貧富の格差を感じましたか。

バンコクでは、首都の中心部に物乞いがいました。また、インドネシアのバンドンでは、道中であどけない顔をした少年が数人寄ってきました。握手を求めているのかと思ったら、「タバコを持っていませんか」と言われて、ショックを受けました。貧困状態が自然と目に入ってくるような状況でした。

■ 船を用いた国際交流の強み・意義とは

船内で長い期間、共同生活を営んだことです。最初は国や文化の枠に縛られていても、長く生活する中で個人として関わりをもつようになるからです。

日本の外交において、個人的には ASEAN 外交が一番成功しているのではないかと感じています。近隣諸国に日本に対して友好的な国々があるというのは素晴らしいことです。「東南アジア青年の船」事業は、日本を応援してくれる人的基盤を輩出してきたことを忘れず、今後もこの事業が継続されることを願っています。

■ 事後活動について

NPO 法人開発教育協会で、長年開発教育・ESD の普及を行っています。1990 年から 2000 年代にかけて、ほとんどすべての都道府県で開発教育地域セミナーを実施しました。その際、地域での担い手に国際交流関係者が多かったです。開発教育は事後活動の一つの受け皿となっていました。

開発教育はその後「国連 ESD の 10 年」で、持続可能な開発のための教育として発展しました。それが現在の SDGs 学習につながっています。最近 SDGs に関する著書として『SDGs と開発教育』など 4 冊出しています。最近では SDGs について地元、龍ヶ崎市の市職員研修や茨城県教育委員会での研修を行いました。

■ 社会貢献意識の高まり

ASEAN 各国青年との交流や各国を訪問して現場を見たことによって、社会貢献意識が高まったと思います。訪問地は政府機関や観光地が多かったのですが、それでもストリートチルドレンなどその国の負の側面を見聞きすることがありました。貧困問題、開発問題を考えるきっかけになりました。

■ 国際的・地域的な人的交流

ASEAN 各国に出張する際には、既参加青年に会い、しばしば情報提供などの支援してもらいました。1975 年度の参加青年は、日本、フィリピン、タイ、シンガポール、インドネシアで同窓会を行い、旧交を温めています。コロナが終息した

後にも、同窓会を実施する計画があります。また、多くのメンバーが Facebook などの SNS で日々連絡を取り合っています。次世代の交流も始まっていて、既参加青年の子どもたちが相互にホームステイするなどの形での交流が続いています。

内閣府の青年国際交流事業における課題や改善点についてご意見をいただけますか。

事業参加直後は、船での体験があまりにも強烈で、すぐに形にできないかもしれません。想いだけが強くなって焦りを感じることもあります。私も「これだ」と思うものを見つけるのに 5 年ほどかかりました。この事業は、モノを作ったり生産活動をしたりしているのではなく、交流が目的ですから、目に見える何らかの成果がすぐに出るわけではありません。しかし、**予期しない効果や副次的な効果にこそ重要なもの**があります。事業実施後にこうした項目についてもヒアリングし、丁寧に蓄積していけば、説得力のあるデータになると思います。

いまの事業の既参加青年に対して求めていることなどがありますか。

近年、多文化共生についてよく聞くようになりましたが、実際に体験したことがある人は少ないはずです。日本で生活していて、周りの外国人とのかかわりの中で、似たような体験をすることがあるかもしれませんが、それは「日本人対外国人」という体験であって、「多文化」とは異なります。**船事業の参加者は船内プログラムを通じて、「多文化共生」を一度体験し、各自の原点として持っているのが強み**であることを忘れないようにしていただきたいと思います。

未来の参加青年への一言メッセージをお願いします。

将来何が役に立つかわかりません。何でも見てやろう！という意気込みで臨んでください。多文化共生の体験を楽しんでください。

田中治彦氏プロフィール

上智大学名誉教授。(認定 NPO) 開発教育協会理事。(財) 日本国際交流センター、岡山大学、立教大学を歴任。博士(教育学)。第 2 回「東南アジア青年の船」事業に参加。専門は青少年の社会教育と ESD (持続可能な開発のための教育)。著書に、『SDGs と開発教育』『SDGs とまちづくり』『SDGs カリキュラムの創造』(学文社)、『SDGs 学習のつくり方』(開発教育協会)、『18 歳成人社会ハンドブック』(明石書店)、『成人式とは何か』(岩波ブックレット) など。